

沖縄語首里方言の推量関連表現

仲原 穰（琉球大学 非常勤講師）

1. はじめに

本発表では「推量表現 共通調査項目」を用いた調査で得られた用例により、沖縄県那覇市首里方言の基本的な推量関連表現ハジについて述べた後、その他の推量表現形式（ラ語尾、エーサニ、テー、アラニ、ガヤー）の特徴やハジとの相違点について述べる。

以下が首里方言の推量表現である。

- 1 連体形, 否定形+ハジ: (カチュル「書く」/カカン「書かない」) ハジ
- 2 ラ語尾 (ラ語尾+ハジ): カチュラ「書くだろう」(カチュラ ハジ「書くだろう」)
- 3 尾略形¹, 否定形+エーサニ: (カチュ「書く」/カカン「書かない」) エーサニ
- 4 断定形+テー/デー : (カチュン「書く」) テー
- 5 否定形+ヤ+アラニ : (カカンタノー「書かなかったのでは」) アラニ
- 6 尾略形+ガヤー : (カチュ「書く」) ガヤー

1のハジは推量の「だろう」に相当する形式である。2のラ語尾、またはラ語尾に終助詞「ヤー」が付き、推測の「だろう」になる。3のエーサニは推量的な判断の「のではないだろうか」に相当する形式である。4の断定形+テー（デーの場合もある）は「のでしょうね」を表す。5のアラニは否定形、あるいは否定形+ヤ（～は）に付く形式である。6のガヤーは会話で用いられる際に「だろうか」に相当する形式としても用いられる。

2. 先行研究

2.1. ハジの先行研究

那覇市首里方言の推量表現形式ハジについて、国立国語研究所（1963：210）では「hazi ①(名) ⊖答。当然そうあるべきこと。cuuru ~ 'jaru Qcunu kuuN. 来るはずの人が来ない。
(中略) ⊖(主として、文末で) だろう。だろうこと。多分…だろうという推量の場合に用いる。Cuuru ~. 来るだろう(来るはずだの意ではない)」と説明している（下線は引用者）。

仲原（2014）の活用表と本文の解説から、那覇市首里方言のハジの接続を示す。

	動詞「持つ」	形容詞「赤い」	形容詞述語「静かだ」	名詞述語「大学生だ」
推量	ムチュル ハジ ムチュラ ハジ	アカサル ハジ	シジカ ヤル ハジ	ダイガクシー ヤルハジ
否定推量	ムタン ハジ	アカコーネーラン ハジ	シジカー アラン ハジ	ダイガクシーヤ アラン ハジ

ARAKAKI（2016：27）は沖縄語のハジを「証拠様態の一つである推測エヴィデンシャル」とし、「確信度や情報の信頼性に関する判断を重視する傾向が見られた」と述べ、「推測の根拠が明確であること、また、その根拠の質が[日本語の「はず」と]異なる」としている。また、日本語の「はず」にある「さとり」の用法を沖縄語「ハジ」が所有していないことも指摘している。

崎原（2018：54）はハジの文が表せるモダリティーを分析し、「(1)《事実未確認（ポテンシャル）》を「(a)〈推量〉」(〈推論〉〈推定・仮定〉〈推測・憶測〉〈確信〉)と「(b)〈反事

¹ 「尾略形」は動詞の断定非過去形の語尾-Nを省略した語形のこと、特定の助詞（接続助詞や終助詞の一部）が下接する。

実仮想)に分け、「(2)《事実確認(リアル)》」を「(a)〈予定不実現〉(b)〈思い出し(記憶)〉(c)〈さととり〉(d)〈断定回避〉」と分類している。また、ハジの文について「《根拠》の有無だけでなく、直接確認による《根拠》か、パターン化された事象からの《根拠》なのかという《根拠》の種類も問わない。また、hakiの文の《根拠》は、その情報獲得の方向(視覚・聴覚等)も問わない。」と分析している。

2.2. ラ語尾の先行研究

首里方言のラ語尾は仲原(2014)の活用表に以下のように示されている。

	動詞「持つ」	形容詞「赤い」	形容詞述語「静かだ」	名詞述語「大学生だ」
推量	[ガ] ムチュラ	[ガ] アカサラ	[ガ] シジカ ヤラ	[ガ] ダイガクシー ヤル ハジ

国立国語研究所(1963:62)に「② 動詞のいろいろな形」の「融合語幹から」作られる語形の一つに「'junur-」に下接する「-a(読むだろうか)」があり、同(1963:67)に「'junura ①(読むだろうか)」で「疑わしいと思う気持ちを表わす。文末に用いるほか、連用形の『中止法』のようにも用いる。sjumuçiga① 'junura①(本を読むのだろうか)。読むこと自身が疑わしい場合には 'jumiga① sjura①(読むのだろうか)となる。'junura① hazi①ともいう。」と説明している。

このラ語尾に推量のハジが付いた語形について、仲原(2014:139)は「連用語幹の基幹ウ段に「ル」が付き、さらに「ハジ」(はず)が後接したものが推量形である。首里方言では現在80歳[1930年代生まれの話者]以上の高齢者には「〜ル=ハジ」と「〜ラ=ハジ」の区別がみられる。「〜ル=ハジ」は現代日本語の「はず」のように、「当然のこと」「道理」が元になり、「きっと〜だろう」の意味を表すこともできる。しかし、「〜ラ=ハジ」は、「ハジ」で言い切ることがあり、「もしかすると〜かもしれない」のように確信度がやや低い場合に用いられることが多い。」と述べている。

一方、崎原(2018:42)では、このラ語尾+ハジについて「-ra hakiは、推論の根拠がある場合や、話し手が確信している場合などにあらわれやすい。」と述べている。さらに、同(2018:54)で「つまり、-ra hakiのあらわれ方が意味的に限定されていて、-ru hakiの用例の方が制限もなく、使用数が圧倒的に多い。話者によっては-ru hakiしかあらわれない場合もあるため、時代の変化とともに、-ra hakiの使用は廃れ、-ru hakiが〈推量〉を表す専用形式になりつつあるかもしれない。」と述べている。

3. 調査結果

【調査概要】

- ・実施：2024年1月～2月
 - ・調査方法：臨地面接調査。共通調査項目の例文の方言翻訳式。
 - ・調査協力者(話者A)：那覇市首里出身・在住の男性1名(1940年生まれ)
- ※補助資料として2007年、2014年に調査した那覇市首里出身・在住の高年層(話者B：女性、1923年生まれ)、(話者C：男性、1932年生まれ)のデータも参照する。
 ※例文は共通調査項目の例文番号を[1]と示す。カタカナ表記(沖縄県2022)で表記する。

3.1. 推量用法—ハジと'エーサニの併用状況

那覇市首里方言の推量形式のうち、最も使用例が多いのはハジである。話者Aの場合、推

量形式、否定形式、過去推量形式など、ほとんどの例文で併用されている状況である。

- (1) アンチャー ウーカタ ティガミ{カチュル ハジドー／カチュエーサニ}。[2]
- (2) アマー、クルマヌ アッカントウ、イーサコー{シジカ ヤル ハジドー／シジカ ヤエーサニ}。
[20]
- (3) アチャー ウーカタ アミ{ヤル ハジ ヤサ／ヤエーサニ}。[21]
- (4) クヌ チノー 'エーディン{タカコーネーラン ハジドー／タカコーネーラン エーサニ}。[23]
- (5) アヌチャー クヌグルンシェー イチュナサギサ ソータクトウ、{イカントル ハジドー／イカントエーサニ}[28]

ただし、推量に隣接するさまざまな用法では、(6)に示した《様態》のようにハジとエーサニが併用できるものも一部みられるが、併用できない用例が増えてくる。エーサニに比べ、ハジの使用範囲が広いことがわかる。

以下の用例ではハジが使用できるもの(①②)と、使用できないもの(③④)に分かれる。

- ① ハジが用いられる(《反実仮想》用例(7))
 - ② ハジの他にエーサニ以外の形式が用いられる(《仮定条件の帰結》用例(8))
 - ③ ハジが併用できないがエーサニは使用できる(《確認要求-知識確認の要求-潜在的共有知識の活性化》用例(9)、《同-同-認識の同一化要求》(10))
 - ④ ハジとエーサニのどちらも用いられず、別の形式が用いられる(《反語(真偽疑問)》用例(11)、《反語(疑問詞疑問)》用例(12))、《疑い(真偽疑問)》用例(13)、《疑い(真偽疑問文)》用例(14))
- (6) アヌッチョー ウーカタ ヤクスンカイ{イチュル グトーン「行くようだ」；イチュル ハジドー／イチュエーサニ／イチュンター「行くみたいだ」／イチギサン「行くらしい」}。[96]
 - (7) 'ウカサッサー。アヌッチュヤレー ヌーガ ヌーヤラワン イチュル ハジ ヤシガ。[81]
 - (8) ユーシ アミヌ フイドウンシェー、ウンドークワイヤ{クンディール ハジドー。／サノーアラニ}。[80]
 - (9) アネ、マジヌーンカイ タカギンディシガ {ウタエーサニ?／ウタノー アラニ?}。アヌ フドゥヌ タカサル ウィキガ ワラビヨー。[91]
 - (10) ヌースガ。ウンナクトウ シーネー 'ウカーサシェー ワカイエーサニ。[92]
 - (11) アンクトール トウクルンカイ チュイッシ{イチュガター／イチュガヤー}。(アラン イカンシガ)。[83]
 - (12) アンネール デージナ シクチャー ターガ スガター (アランサ{ターガン サンサ／ターヤティン サンヨー}。[84]
 - (13) アヌッチュガ {イチュガヤー／イチュガター／イチュガターヤー}。[85]
 - (14) アヌッチュ {ヤレー マーカイ イチュガヤー／ヤラー マーカイガ イチュラターナー}。[86]

(7)(9)のノーアラニ「ではないか」のアラニは、直前にとりたて助詞ヤ「は」が必要となる(前の音と融合してノーに変化)。(11)~(14)の「だろうか」に用いられるターとガヤーが併用される。さらに「どうぞよ」相当のターヤーが用いられる場合がある。なお、(14)では ga 結び形²(ラ語尾) +ター+ナー「の?」が下接する例も併用される。

² ラ語尾となる語形のうち、【ga 結び形】は係助詞 ga と呼応することで、推量・疑問文となる。例：ターガガ イチュラ。「誰が行くのだろうか」

3.2. 確認要求用法—ラ語尾と他形式との併用

このラ語尾に終助詞ヤーが付いた形式は[93]~[94]《確認要求-命題確認の要求》と[95]《確認要求-だろうね》で主に用いられる。

(15) ナガタビサーニ {’ウタタラヤー／’ウタテンター}。[93]

(16) クマヌ ラーメノー, ’イーサクネー {マーサラヤー／マーサエーサーニ}。[94]

(17) シカットゥ イーチケー {シツチャラヤー／シツチェンデーヤー³}。[95]

このようにター, デーやエーサーニとも供用される《確認要求》の場合には, ラ語尾にヤーが付いた語形を用いる。ラ語尾だけだと推量形「だろう」にしかならないが, 聞き手と共有した情報に対して確認, 同意を求めるヤーが下接することによって聞き手への働きかけが生まれるとみられる。では, ヤー以外との組み合わせについてみてみよう。

以下の(18)(19)ようにワカラン(分からない)が後続する際にもラ語尾が用いられる。

(18) イチュガ スラ ワカラン。イカンガ スラ ワカラン。[54]cf

(19) フイガ スラ ワカランドー。[98]

(20) ターガ イチュガ スラ シラン。[79]

(18)~(20)はいずれも推量形のラ語尾にワカランやシランなど, 話し手自身が確たる情報を得ていないことを示すことにより, 「かもしれない」という《可能性判断》や《可能性》を示している例である。

3.3. 意志・勧誘用法

次の例は意志や勧誘を表す用法であるが, ハジ, エーサーニは使用できない。

(21) トー, ワーガ {イチュサ／イチュンター}。[105]

(22) クヌイチ ムヌンデー カミーガ {イカナ／イカニ／イカンナー／イチュンターヤー}。[106]

用例(21)《意志》では話し手の意志や判断を伝える終助詞サと動詞の尾略形が結びついた例であるが, 断定形に「ター」が付いた語形も併用される。この「ター」について仲原(2014)では「のだ」相当としたが, それは通常の「イチュン」に比べ, 「イチュンター」の方が話し手の意志を示すためである。「のだ」に相当する語形ではないが, その行為を行う意志を相手に伝える形式とみてよいだろう。なお, 沖縄語には(21)以外にも志向形という意志を伝えたり, 行為を予告したりする語形がある。その場合, ラ語尾と同じく-a語尾になる。これは「未然形+む」由来の語形であり, 「む」が脱落したために未然形と同じく-a語尾になったものである。用例(22)の《勧誘》の場合, 動詞イチュンの否定形, イカンの志向形「イカ」に誘いを示す終助詞ナやニが付く語形が《勧誘》を示している。また, イカンナーは「行かないか」に相当する語形であり, テーの付いた語形が《勧誘》を示していることがわかる。

4. ラ語尾+ハジ

最後に推量表現を示すラ語尾とハジが結びついた形式の用例をあげる。用例は仲原(2007:8)から引用する(表記は本発表の用例に合わせた(以下同じ)。また, 原因・理由表現も代表的な例だけに限定した。詳しくは元の文献を参照。調査協力者は話者C)。

(23) ヤマウター ウフォーク フトータラ ハジ ヤクトゥ, ナダレヌ シワ ヤッサー。

「山では多く降っていただろうから, 雪崩が心配だ。」

(24) フカー フィーサラ ハジ ヤクトゥ, チノー カサビティ ?ンジラ。

³ シツチェーンはシテアル形である。

「外は寒いだろうから、着物を重ねて出かけよう。」

(25) ナマヌ ヨーシカラシーネー アチャン アミ ヤタル ハジ ヤクトゥ, 'エンスコートウヤミンカイ ナイラ ハジ。

「この様子からすると明日も雨だろうから、遠足は取り止めになるだろう。」

上記のように那覇市首里方言でラ語尾にハジが付いた形式が以前はみられた(話者B, Cの年代あたりまで)。しかし、話者の年齢が下るにつれ、近年はラ語尾+ハジの用例を集めるのが難しくなっている。

以下の(26)(27)のように、通常ル語尾+ハジとラ語尾+ハジとでは、意味にも違いがありそうである(用例は仲原 2014: 139-140。今回の発表に合わせ、日本語訳を一部改めた。)ru 語尾+ハジの方が語源「筈」の意味を少し残していると考えられる。

(26) アレー ガッコーウティ ビンチョーソール ハジドー。

「彼/彼女は[きっと]学校で勉強しているはずだよ。」

(27) アレー グテーヤクトゥ, ウヌアタイェー ムチュラ ハジ。

「彼/彼女は力持ちだから、[たぶん]そのくらいは持つだろうよ。」

5. まとめ

上記の例文(1)~(22)で使用されている首里方言の推量表現の使用状況をまとめた。例文番号は共通調査項目の番号である。

例文 [番号]	2	2	2	2	2	9	8	8	9	9	8	8	8	8	9	9	9	5	9	7	1	1	
推量表現	0	1	3	8	6	1	0	1	2	3	4	5	6	3	4	5	4	8	9	5	0	0	
連体形・否定形+ハジ	+	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
尾略形・否定形エーサニ	+	+	+	+	+	+	-	-	+	+	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	-	-
ラ語尾+ヤー (その他)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	-	-
断定形+テー/デー	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	+	+	+	+	+	-	+	-	-	-	-	+	+
否定形+ヤ+アラニ	-	-	-	-	-	-	-	+	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
尾略形ガヤー	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	-	+	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-

首里方言の推量表現ではハジ, エーサニの用例が多くみられる。今回の発表では「推量に隣接する意味・用法」の例を多く取り上げたため、ラ語尾やテーの用例も多いようにみえるが、使用範囲が限られている。現状ではハジが使える範囲が最も広く、制限が少ない。よってハジは《推量》に近く、エーサニは根拠を必要とする《推定》に近い形式とみることができそうである。今後は共通調査項目の全項目で上記のような分析をしていきたい。

参考文献

- 国立国語研究所 (1963) 『沖縄語辞典』大蔵省出版局
- 崎原正志 (2018) 「琉球語沖縄首里方言のモダリティ: 叙述・実行・質問のモダリティを中心に」琉球大学 (博士論文)
- TOMOKO ARAKAKI (2016) 「A Comparative Study of the Evidential/Epistemic Markers: *hazi* in Ryukyuan, *hazi* in Uchinaa-Yamatuguchi, and *hazi* in Japanese」『沖縄キリスト教大学院大学論集』12, pp. 15-27, 沖縄キリスト教大学院大学
- 仲原 穰 (2007) 「沖縄県那覇市首里方言の原因・理由表現」方言文法研究会『全国方言文法辞典《原因・理由表現編》』pp. 2-9, 方言文法研究会
- 仲原 穰 (2014) 「沖縄県那覇市首里方言」『全国方言文法辞典資料集(2)活用体系』, pp. 136-145, 方言文法研究会